

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2016 谷口洋

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

なお、本講義資料は、講義内で配布された資料から抜粋・再加工をしています。

学術俯瞰講義二〇一六春「古典は語りかける」

屈原とは何者か

二〇一六年五月一日・二五日

教養学部 谷口 洋

はじめに——ここでのスタンス

一、屈原の時代：戦国時代

秦 Vs. 東方六国

楚 懷王 秦で客死（前二九六）

頃襄王 郢都陥落（前二七八）



## 二、屈原の伝記…『史記』屈原賈生列伝

王に連なる一族

忠誠、諫言、中傷

放逐、放浪

入水

## 三、楚辞と屈原

『漢書』芸文志「屈原賦二十五篇」

王逸『楚辞章句』

#### 四、「離騷」の内容

良き日に生まれた清き「吾」

周囲との軋轢

天上遊行とその挫折

占いと良きお告げ

再び天上へ

中断と終結

## 五、楚辞と屈原の影響

賈誼「弔屈原賦」

『楚辞章句』の模範的作品

辞賦文学 陶淵明「帰去来兮辞」

粽とペーロン

金聖嘆「六才子書」

莊子・離騷・史記・杜甫・水滸伝・西廂記

## 六、近代中国の屈原解釈

胡適「読楚辞」

聞一多

郭沫若「屈原研究」

戯曲『屈原』

「愛国詩人」屈原

## 七、日本における翻訳と研究

文学的アプローチ／宗教学・民俗学的アプローチ

屈原を「作者」とする解釈／屈原と切り離れた解釈

## 八、日本人にとって中国古典とは？

文庫本で読める中国古典

西洋古典の場合との比較

## おわりに

文学にとって「作者」とは何者か？

「屈原とは何者か」と問うあなたは何者か？

「前漢」司馬遷 『史記』屈原賈生列傳

屈原者、名平、楚之同姓也。為楚懷王左徒。博聞彊志、明於治亂、嫺於辭令。入則與王圖議國事、以出號令。出則接遇賓客、應對諸侯。王甚任之。

上官大夫與之同列、爭寵而心害其能。懷王使屈原造為憲令、屈平屬草稟未定。上官大夫見而欲奪之、屈平不與、因讒之曰、王使屈平為令、衆莫不知。每一令出、平伐其功、以為非我莫能為也。王怒而疏屈平。

屈平疾王聽之不聰也、讒諂之蔽明也、邪曲之害公也、方正之不容也、故憂愁幽思而作離騷。……屈平正道直行、竭忠盡智以事其君、讒人閒之、可謂窮矣。信而見疑、忠而被謗、能無怨乎。屈平之作離騷、蓋自怨生也。……自疏濯淖汙泥之中、蟬蛻於濁穢、以浮游塵埃之外、不獲世之滋垢、皜然泥而不滓者也。推此志也、雖與日月爭光可也。……

秦割漢中地與楚以和。楚王曰、不願得地、願得張儀而甘心焉。張儀聞、……如楚、又因厚幣用事者臣靳尚、而設詭辯於懷王之寵姬鄭袖。懷王竟聽鄭袖、復釋去張儀。是時屈平既疏、不復在位、使於齊、顧反、諫懷王曰、何不殺張儀。懷王悔、追張儀不及。其後諸侯共擊楚、大破之、殺其將唐昧。

時秦昭王與楚婚、欲與懷王會。懷王欲行、屈平曰、秦虎狼之國、不可信、不如毋行。懷王稚子子蘭勸王行、柰何絕秦歡。懷王卒行。



入武關、秦伏兵絕其後、因留懷王、以求割地。懷王怒、不聽。亡走趙、趙不內。復之秦、竟死於秦而歸葬。

長子頃襄王立、以其弟子蘭為令尹。楚人既咎子蘭以勸懷王入秦而不反也。……令尹子蘭聞之大怒、卒使上官大夫短屈原於頃襄王、頃襄王怒而遷之。

屈原至於江濱、被髮行吟澤畔。顏色憔悴、形容枯槁。漁父見而問之曰、子非三閭大夫歟。何故而至此。屈原曰、舉世混濁而我獨清、衆人皆醉而我獨醒、是以見放。漁父曰、夫聖人者、不凝滯於物、而能與世推移。舉世混濁、何不隨其流而揚其波。衆人皆醉、何不鋪其糟而啜其醢。何故懷瑾握瑜、而自令見放為。屈原曰、吾聞之、新沐者必彈冠、新浴者必振衣、人又誰能以身之察察、受物之汶汶者乎。寧赴常流、而葬乎江魚腹中耳。又安能以皓皓之白、而蒙世俗之溫蠖乎。

乃作懷沙之賦。其辭曰……於是懷石遂自沈汨羅以死。

屈原既死之後、楚有宋玉、唐勒、景差之徒者、皆好辭而以賦見稱。然皆祖屈原之從容辭令、終莫敢直諫。其後楚日以削、數十年竟為秦所滅。

自屈原沈汨羅後百有餘年、漢有賈生、為長沙王太傅、過湘水、投書以弔屈原。

屈原なる者は、名は平、楚の同姓なり。楚の懷王の左徒と為る。博聞にして彊志、治乱に明るく、辞令に嫺ふ。入れば則ち王と国事を図議し、以て号令を出だす。出づれば則ち賓客に接遇し、諸侯に応対す。王甚だ之に任ず。

上官大夫 之と列を同じくし、寵を争いて心に其の能を害む。懷王 屈原をして憲令を造為らしむるに、屈平 草稿を屬るも未だ定まらず。上官大夫 見て之を奪はんと欲するも 屈平与へず、因りてこれを讒して曰く、「王 屈平をして令を為らしむるは、衆知らざる莫し。一令出づる毎に、平 其の功を伐り、以て我に非ざれば能く為す莫しと為すなり」と。王怒りて屈平を疏んず。

屈平 王聴くことの聡からざる、讒諂の明を蔽ふ、邪曲の公を害する、方正の容れられざるを疾み、故に憂愁幽思して「離騷」を作る。……屈平 道を正しくし行ひを直くし、忠を竭くし智を尽くして以て其の君に事ふるに、讒人之を聞つるは、窮すと謂ふべし。信にして疑はれ、忠にして謗らるれば、能く怨み無からんや。屈平の「離騷」を作れるは、蓋し怨みより生ずるなり。……自ら濯淖汚泥の中より疏き、濁穢より蟬蛻し、以て塵埃の外に浮遊し、世の滋垢を獲ず、皜然として泥むるも滓まざる者なり。此の志を推すや、日月と光を争ふと雖も可なり。……

秦 漢中の地を割きて楚に与えて以て和せんとす。楚王曰く、「地を得るを願はず、願はくは張儀を得て甘心せん」と。張儀聞き……楚に如き、又た因りて幣を事を用うる者臣靳尚に厚くして、詭弁を懷王の寵姫鄭袖に設く。懷王竟に鄭袖を聴き、復た釈して張儀を去らしむ。是の時 屈平既に疏んじられ、復た位に在らず、齊に使ひし、顧反して、懷王を諫めて曰く、「何ぞ張儀を殺さざる」と。懷王悔い、張儀を追うも及ばず。其の後 諸侯共に楚を撃ち、大いに之を破り、其の將唐昧を殺す。

時に秦の昭王 楚と婚し、懷王と会せんと欲す。懷王行かんと欲するに、屈平曰く、「秦は虎狼の国、信ずべからず、行かざるに如かず」と。懷王の稚子 子蘭、王に行くことを勧めて、「奈何んぞ秦の歡を絶たん」と。懷王卒に行く。武関に入るに、秦の伏兵其の後を絶ち、因りて懷王を留め、以て地を割かんことを求む。懷王怒りて、聴かず。亡げて趙に走るも、趙内れず。復た秦に之き、竟に秦に死して歸りて葬らる。

長子頃襄王立ち、其の弟の子蘭を以て令尹と為す。楚人 既に子蘭を咎むるに懷王に勧めて秦に入りて反らざるを以てするなり。……令尹子蘭之を聞きて大いに怒り、卒に上官大夫をして屈原を頃襄王に短らしめ、頃襄王 怒りて之を遷す。

屈原 江浜に至り、被髪して行くゆく沢畔に吟ず。顔色 憔悴し、形容 枯槁たり。漁父見て之に問ひて曰く、「子は三閭大夫に非ざるか。何の故にして此に至るか」と。屈原曰く、「世を挙げて混濁して我独り清み 衆人皆酔ひて我独り醒む 是を以て放たる」と。漁父曰く、「夫れ聖人なる者は、物に凝滞せずして、能く世と推移す。世を挙げて混濁すれば、何ぞ其の流れに随がひて其の波を揚げざる。衆人皆酔えば、何ぞ其の糟を舗らひて其の醢を啜らざる。何の故に瑾を懷き瑜を握りて、自ら放たしむるか」と。屈原曰く、「吾 之を聞く、新たに沐する者は必ず冠を弾き、新たに浴する者は必ず衣を振るふと。人又た誰か能く身の察察たるを以て、物の汶汶たる者を受けんや。寧ろ常流に赴きて、江魚の腹中に葬られんのみ。又た安くんぞ能く皓皓の白を以てして、世俗の温蠖を蒙らんや」と。

乃ち「懷沙の賦」を作る。其の辞に曰く、……是に於いて石を懷きて、遂に自ら汨羅に沈みて以て死す。

屈原既に死するの後、楚に宋玉・唐勒・景差の徒なる者有り、皆辞を好みて賦を以て称せらる。然れども皆屈原の従容たる辞令を祖とし、終に敢へて直諫する莫し。其の後 楚は日に以て削られ、数十年にして竟に秦の滅ぼす所と為る。

屈原汨羅に沈みてより後 百有余年、漢に賈生有り、長沙王の太傅と為り、湘水を過ぐるに、書を投じて以て屈原を弔ふ。



〔後漢〕王逸『楚辭章句』目錄

（『楚辭補注』本）

楚辭章句目錄
第一卷
離騷經第一 屈原
第二卷
九歌傳第二 屈原
第三卷
天問傳第三 屈原
第四卷
九章傳第四 屈原
第五卷
遠遊傳第五 屈原
第六卷
卜居傳第六 屈原
第七卷
漁父傳第七 屈原
第八卷
九辯傳第八 宋玉
第九卷

招魂傳第九 宋玉
第十卷
大招傳第十 屈原或言景差
第十一卷
惜誓傳第十一 賈誼
第十二卷
招隱士傳第十二 淮南小山
第十三卷
七諫傳第十三 東方朔
第十四卷
哀時命傳第十四 嚴忌
第十五卷
九懷傳第十五 王褒
第十六卷
九歎傳第十六 劉向
第十七卷
九思傳第十七 王逸
楚辭章句目錄終

胡適「読楚辞」（一九二二年講演、一九三三年改稿）

屈原とは誰か。この問いは誰も発したことがないものだ。私はここで屈原とは何者かを問わねばならないばかりか、屈原という人がそもそもいたのかを問わねばならない。……

私から見れば、屈原とは一種の複合物であり、一種の「標的」となる人物であって、黄帝や周公と同類であり、ギリシャのホメーロスと同類なのである。どういふのを「標的」人物とよぶかという、昔は無名の庶民によって発明されたものが多かったが、後の人が恩を感じてそれに報いようとして、あるいは便利のように、しばしば多くの発明を一人か二人の有名な人物の功績の一覧表に記した。最も古いものは、みな黄帝の発明だと言い、少し昔のものは、みな周公の発明だと言った。……

思うに、屈原は二十五篇の『楚辞』のうちの一部の作者であつたかもしれないが、のちにしだいにこの二十五篇の全部の作者とみなされるようになったのである。ただこのときには、屈原はただ文学の標的でしかなかった。のちに漢代の老学者がその時代の「君臣の大義」を『楚辞』の中に読み込んで、屈原を忠臣の代表とし、ここから屈原はまた倫理の標的ともなったのである。

（谷口試訳、傍点省略）

聞一多「屈原問題——謹んで孫次舟先生にただす——」（一九四四年）

『楚辞』という伝統の源については、従来真剣に追究した人がいなかった。その価値に対しても、正確な見方は減多になかった。私が思うに、伝統の源の問題の探究では、かつて廖季平氏の、「離騷」は秦の博士の「仙真人詩」であるという説が、本当の意味でちよつとふれたものであった。そのほかには、孫氏のこのたびの「疑問」を、貢献の最も大きなものに数えるべきだろう。……ただ私は、そのような見方だけでは、「離騷」の全部の問題を解決することはできないと思う。率直に言えば、孫氏の見方によれば、ここで男がなぜ女のような口をきくのかを解釈できるだけで、なぜでたらめなこと（あるいは神話）を話すのかはまだ解釈できない。……こういう話は、「仙真人詩」でなければ十分解釈できない（もちろん秦の博士の「仙真人詩」ではない。どうして屈大夫もこういう詩を作ることができないということがあろうか！）。……要するに、私は「離騷」が絶命の書などだとは思信しない。私はこの素晴らしい文を読むたびに、メイクも鮮やかに現れた、風采も立派で、すっきりと垢抜けた美男子が、名を正則、字を靈均という「神仙中の人」を演じて話している（むしろ歌っている）のが見えるような気がする。ところが話しているうちに、俳優は彼の劇中人物の身分を捨て、自らの気持ちを話すよ

うになり、ここにおいて個人の身の上が、国家の命運が、悲しみや怨みや怒りとなって、マグマのように聴衆に噴き出し、何千人何百人もの心をあぶりつけ、燃え上がらせるのだ——このときおそらく彼は自分でも演じているのか世をのしっているのかわからないだろう！

（谷口試訳）



## 郭沫若『屈原研究』

（第一章のみ『屈原』の題で一九三五年、全体は一九四二年）

屈原が、根っからの愛国者であることは、彼の作品がそれをもの語っており、彼の行為もそのことをもの語っている。先秦時代の学者は、孔子以来、ほとんどみな大一統主義を懐いていた。彼らはみな、中国の状況を統一しようと考えており、その目的を達することができさえすれば、国を選ばずして仕えるという傾向があった。……しかし、屈原はそうではなかった。彼は懷王の時に疏んぜられて、放浪はしたが、国を出ようとはしなかった。頃襄王の時には放逐されて、挫折したが、やはり国を出ようとはしなかった。彼は終始楚の国を恋い慕い、自分がもとの位に復帰できることを願い、自分の懐いている「美政」（「離騷」に見える）の実行できることを望んでいた。（第一章）

（稲畑耕一郎訳、『郭沫若選集』第八卷「屈原研究」、雄渾社、一九七八、八四―八五頁）

道徳の内容は全く時代によって異なるが、道徳の徳目（語彙）には永遠に不変なものがある。たとえば、仁義という徳目は、その内容、すなわちどうすれば仁であり、どうすれば義であるかということとは、時代によって変わるが、仁であり、義であるべきだということとは、変わろうはずがない。人を人とするのが仁であり、行なうべきことを行なうのが義であり、これは永遠に不変である。屈原は深くその時代精神を把握した人で、彼は民生を重視し、賢者や才能ある人物を尊敬し、徳政を以て中国の大統一を謀ろうとしたが、これがまさしく彼の仁であった。しかも、彼は徹底的に身をもって努力実践した人で、これが彼の義であった。私には、彼はむしろ単なる革命詩人であっただけではなく、ましてや「芸術至上主義者」などとはとても言えないと思われる。（第三章）

（同書、一四九頁）

## 主要参考文献

### 『楚辞』の主な翻訳

青木正児『新訳楚辞』（春秋社、一九五七）＊のち『青木正児全集』第四卷

目加田誠『詩経・楚辞』（平凡社「中国古典文学全集」、一九六〇）

＊訳のみ

藤野岩友『楚辞』（集英社「漢詩大系」、一九六七）

星川清孝『楚辞』（明治書院「新釈漢文大系」、一九七〇）

黒須重彦『楚辞』（学習研究社「中国の古典」、一九八二）

目加田誠『滄浪のうた 屈原』（平凡社「中国の名詩」、一九八三）

＊「離騷」のほかは抄訳

### 鑑賞・論考を主とするもの

目加田誠『屈原』（岩波新書、一九六七）

小南一郎『楚辞』（筑摩書房「中国詩文選」、一九七三）

白川静『中国の古代文学』 神話から楚辞へ』（中央公論社、一九七六）＊のち『白川静著作集』第八卷

竹治貞夫『憂国詩人 屈原』（集英社「中国の詩人 その詩と生涯」、一九八三）

福島吉彦（牧角悦子と共著）『詩経・楚辞』（角川書店「鑑賞中国の古典」、一九八九）

牧角悦子『中国古代の祭祀と文学』（創文社「中国学芸叢書」、二〇〇六）